



特定非営利活動法人サポートセンターとまり木

WAM助成 事業報告書

◆はじめに

この報告書は、2022年度サポートセンターとまり木が助成を受けて実施した活動をまとめたものです(※)。制度ではないけれどもニーズがある、とまり木独自で取り組みたいけれども活動資金の調達が難しい…。そこで独立行政法人福祉医療機構(以下WAM)の令和3年度社会福祉振興助成事業「コロナ禍における生活困窮者及びひきこもり支援に係る民間団体活動助成事業」に応募し活動支援を受けました。3本柱の事業それぞれの振り返りは次ページから記しますが、総じてこの一年間の継続によって、相談者や居場所を必要とした人の受け皿となることができました。継続的な取り組みから来年度とまり木が強化する課題も明らかになってきました。居場所事業の一部は松本市として取り組む地域づくり事業(重層的支援体制整備事業の一つ)に発展する兆しも見えています。変化への期待感と一実施主体としての責任感とを感じています。

(※)サポートセンターとまり木の2022年度事業報告書は例年6月を目途に別途作成しています。

実際の利用者を含む本助成事業に関わったすべての方、サポートセンターとまり木の活動に関心を寄せてくださる方、各支援機関の方々に松本市内のいくつもの地域で、あるいは松本から離れた地域での取り組みのきっかけになれば幸いです。実際に、とまり木では松本地域の他団体や長野県内外で行われている取り組みからたくさんのヒントをいただき反映できるようになりました。こうした所でもWAM助成をはじめとするつながりの力に感謝しております。

◆とまり木とは？

2019年発足、長野県松本市のNPO法人。一時的に羽を休めて再出発したい人のお手伝いをしています。



詳しくは
☞こちら

- I 相談者の重点的ケア……………2ページ
- II 居場所事業「水曜カフェ」……4ページ
- III 安否確認・緊急対応……………6ページ
- 「利用者に聞きました!!」……………8ページ



独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

I 相談者の重点的ケア

- 【目的】 相談者ケアを行い、スムーズに支援を受けられるようにする。
- 【内容】 ボランティアスタッフと核になる正職員の配置によって日常生活のサポートならびに傾聴に重きを置いた重点的ケアを行う。
- 【実施場所】 シェアハウスにて、対面を原則に実施
- 【実施期間】 2022年度 月曜日から土曜日
- 【実施内容】 地域ボランティアからなる世話人6名が日替わりで朝の時間帯を中心に活動し、日中は正規職員1名を中心に相談者対応を行う。この事業の背景には、相談者が単に住まいや生活費に困っているだけではなく、主に3点から支援を受ける前の阻害要因を抱えていることが多かった。

とまり木相談者の支援阻害要因

- ① 地域で単身独居生活に移行するための生活力（昼夜逆転せずにゴミ出し、掃除、買い物、受診等）向上に伴走する必要がある。
- ② 長らく社会生活を送らなかつたりして、コミュニケーションに課題があり、困りごとが分からない、適切な表出の仕方と解決が当事者間では難しい、各種手続きや受診時に訴えたいことがあるにも関わらず伝え方がわからず消極的になってしまうため、準備から一緒に行く必要がある。この作業をせずに手続きや受診だけを指示をしても課題の解決にならない。（本人が気づいていないが障害であり支援につなぐこともある）。
- ③ 苛立ちや不安感や疾病からの不調等で、相談の一步手前の環境整備が必要である。

【実施数】 2023年2月末までの件数26件（29名、うち2件は世帯構成員含む）

【成果】

- ◎不安感や不満などの適切な表出が困難な相談者が多いが、飲酒や喫煙で紛らわすことや、モノにあたるのではなく、話してもよいことだとの気づきを得て変わっていく働きかけができた。相談者が安心を感じ自身の課題解決に向けた取り組みをしやすくなり、相談の停滞や意欲の減退等は目に見えて減少した。2022年度相談では前年度までと比較して住居以外の課題まで相談が行き届いている。就労、受診、連絡先の確保の数から各相談者がすべきことを行っている。相談中の失踪・拘留者は今年度ゼロ。
- ◎地域住民ボランティアと核になる正規職員の連携は遅滞なくできた。
- ◎新型コロナウイルス感染症で最小限の人員での関わりになり、職務として感染者対応を任せるための労働環境整備が不十分であったことがはっきりした。それでも2022年度推進してきた相談支援のDX化によって、在宅勤務での代替が可能だったため相談支援が全面的停止に陥ら

ずに済んだ。その後もメール相談やオンラインの活用が定着してきている。

【課題】

- 相談者のケアのうち、地域のボランティアがこれまで担ってきた部分については、新型コロナウイルスのクラスター発生時にその脆弱性が明らかになった。具体的には同居家族への感染リスク、基礎疾患のあるスタッフ、主たる職場を休業せざるを得なくなる等のリスクがあり、1か月程度は最小限の人員で事業を実施した。
- 知的障害や精神疾患によって、相談員へ過度の依存をしてしまう相談者への対応はある程度改善したが、ケアにかかる時間・回数は他の相談者の場合とは異なる（7ページ参照）。相談者の間で不公平感を感じさせてしまうことや、相談員の疲弊を招くケースもある。個別ケースへの対応にとどまらず、自己決定が難しい相談者にどう支援するか今後更に検討したい。また、いつまでも住まいが決まらない等先行きの不安から発生する困り事については居住支援を迅速かつ円滑に進める多機関での支援体制整備によって解決できることもあるため、法人としての取り組みを加速させていくよう努めたい。
- 出所・刑余の属性を持つ相談者への支援においては、指導的側面とケア的側面との両輪によって進めていく必要を感じた。具体的には相談員を複数人にし、その役割を相談者がわかるようにしながら進める。
- 地域住民でボランティアに従事する人の変化があった。（年齢的に困難を感じる作業や時間帯、コロナ禍の長期化によるメンタルヘルス悪化や物価高騰による生活への影響）
- 相談支援のDX化（継続）



【上 写真】とまり木の相談員たち。「支援とは尊厳の回復である」と写真中央のスタッフが重点的ケアにあたった。

【右 写真】居場所事業、ハンドメイドカフェの作品 手仕事へ集中しながら談笑。水曜カフェとは異なる時間が流れ、毎回素敵な作品が完成している。



Ⅱ 居場所事業 水曜カフェ／ハンドメイドカフェ

- 【目的】 日中の居場所提供と利用者の組織化を行うこと。
- 【内容】 日中の居場所提供を拡大充実させ、利用者に役割を与え担い手に育てていくこと、日常的に開放し個々人の居場所を提供できるようにする。
カフェにおいては利用者とともに内容の充実を図っていく、いろいろな背景の人が集まって談話するための核となるファシリテーターを複数養成する。
- 【実施場所】 シェアハウス 1階共用利用室 2室
- 【開催日時】 2022年度 日中の開放月～土、「水曜カフェ」毎月第1, 2, 3水曜日午前中、「ハンドメイドカフェ」毎月1回第2土曜日午後の2時間
- 【実施内容】 2022年度は8月の新型コロナクラスター発生時を除き、水曜カフェは5月から2023年3月末までの集計値で計29回開催延べ160人の参加があった。一回あたりの平均参加者数は5.5人で会場の規模や対応スタッフ数が平均3名であることから、規模に合った実施と考える。ハンドメイドカフェは同期間で8回実施、参加者は延べ47人であった。

【成果】

- ◎水曜カフェはスタッフの焙煎したコーヒーが飲めるということもあり好評だった。
- ◎カフェのついでに相談や見学を行うという利用形態も定着しつつある。
- ◎相談者に要配慮事項がある場合はカフェスタッフにも共有した上で対応した。
- ◎水曜カフェにおいては、複数人での談話となるため対応可能なファシリテーターを複数人配置し実践を重ねてきた。このことにより、参加者が話したい人と話せる選択肢を提供し、一対一では行き詰ってしまう参加者同士へ共通の話題提供、オンラインでの同時参加を進めた。
- ◎オンラインであっても参加できた人の中には、実際に居住していた地域では孤立し、各種相談支援機関との関係も行き詰っている人もいた。水曜カフェに参加するようになってからは穏やかな表情になり、歌を披露し、他のカフェ参加者に自分の知っていることを情報提供しようとする等の変化や孤立の解消が見て取れた。同時に転居相談も好転し生活も安定化しつつある。とまり木が主相談機関とは別地域の別組織だったこと、水曜カフェが参加者を居住地で制限しないことと合わせて可能となった事例と考えている。
- ◎ハンドメイドカフェは自走度の比較的高い事業として安定的な運営開催ができた。会場がシェアハウス1階であることのメリットとして、これまで手工芸に接点のなかった人が気軽に様子を見て、実際の手作業を体験しやすい。とりわけ住居喪失に陥るほどの生活困窮の中には、生活の大半が消費行動であることが金銭的な逼迫を招いてしまったこと、余暇がコンテンツ消費とほぼ同義であることなどの原因もある。そのため、手作業という